

第1回 東京都「緑の広域計画（仮称）」策定に向けた有識者検討委員会

議事録

1. 日 時 令和7年12月11日（金） 10:00～12:00

2. 場 所 都庁内会議室

3. 議 事

1) 検討背景

(1) まちづくりにおける「みどり」の取組と成果

(2) 「みどり」に求められるもの

(3) 東京都が抱えるみどりの課題

2) 行政計画としての位置づけ

3) 検討スケジュール・検討項目・計画構成

4) 東京のみどりの大事にすべき特徴・価値

5) 東京のみどりが目指す姿

6) 次回に向けた意見交換

4. 有識者からの意見

1) 検討背景

- ・ 2050年を目標とした時に、次世代にどうつないでいくのかという観点があってもいいのではないか。
- ・ みどりの課題として、暮らしや人とのつながりについても整理が必要ではないか。
- ・ 現状把握やその周知等については絶対量ではなく、行政区域の面積に対する緑地面積比率など、相対量で表した方がわかりやすいのではないか。
- ・ みどりを実感する住民としての私たちだけでなく、規模が小さくてもみどりを作り出していく側の私たちの市民参加という観点も意識しても良いのではないか。
- ・ 都民の実感に即した評価につなげるとなると、都の計画ではあるが、国や区市町村、民間事業者等の領域についても対象としてバランスよく見せていく必要がある。

- ・東京のみどりの保全に寄与してきた屋敷林や生産緑地は、住宅の不足・高騰が課題となっている東京都において、住宅用地として狙われやすいということを深く自覚する必要がある。
- ・土地を利用する側に緑地をどのように作り出して保全してもらうかを、積極的に考えていかないといけない。
- ・集合住宅の供用施設のような形で、暮らしとみどりの接点を積極的に作っていく作戦の立て方ということが非常に重要だと考える。需要を背景にみどりの管理等にお金を払う民間活力を強く認識すべき。
- ・SDGsの考え方からも、子供たちが生き生きと育つために、山や川、海などの自然空間とその生態系、あるいは身近な原っぱや路地裏といった空間が重要。人が一方的にみどりに対して関与するというものではなく、みどりにによって私たちは育まれている、とりわけ子供たちはそういう存在である。
- ・思春期年代の子供たちにとって、公園は、ボール遊びを中心にとっても使いづらい場所になっている。子供の定義を念頭において幅広い議論が必要である。
- ・好きなようにスポーツができる、自然豊かな場所を提供していくということが求められていると考える。

2) 行政計画としての位置づけ 及び 3) 検討スケジュール・検討項目・計画構成

- ・2050年代を目標年次として、それまでに齟齬が生じた際に見直しを行うことが必要である。その予定についても言及が必要ではないか。
- ・現在並行して検討が進められている「都市づくりのグランドデザイン」では、みどりの観点から積極的に提言を行ってほしい。
- ・指標検討の話もあるため、達成状況を確認する意味でもPDCAが必要ではないか。

4) 東京のみどりの大事にすべき特徴・価値

- ・グリーンインフラの視点は書かなくてよいのか。
- ・都心部や丘陵地、あるいは西多摩の山林など地域差がある中で、広域計画として課題を捉えて、目標作りと施策に落とし込んでいく必要がある。
- ・河川などの自然水面や噴水など人工の水面が東京には多く、水の都でもある。子供たちは水辺で遊ぶのが好きであり、多様な生物とも出会える場所でもあるので、水の環境にも着目してほしい。

- ・遊びなどの利用を検討するときに「危険」ということが話題に出てくるが、リスクとハザードは違う。「リスク」は子供たちの成長にとって必要となる冒険やチャレンジを意味する。「ハザード」は直接生命にかかわる危険を意味する。この両者の意義の違いを理解し、大人自身もリスクとハザードを見極める力を養っていくことが重要。
- ・スポーツやコンサートなど、自然の中での文化活動は感動的。例えば、自然の中でコンサートができる環境を作れば、多額な設備投資は不要であり、かつ自然の中での文化活動を通して心と体が養われるのではないか。
- ・余暇において、日本人は、何か活動をすることを目的にしがちであるが、何もしないという考えがあってもよい。のんびりするということは重要であり、リラックスできるみどりのスペースも必要である。
- ・ツーリストにとってのみどりの観点をもう少し可視化すべき。海外ではフットパスやアドベンチャーツーリズムが人気。トレイル、高尾山などはインバウンドに大変人気である。ツーリストの視点での、公園での楽しみ方や、みどりの保全というような観点を盛り込んでいただきたい。
- ・クマ対策などは観光産業にとっても重要な課題。野生動物との共生も、重要になってくるのではないか。
- ・自然の地形のつながりを考えると、隣接県との認識をどう合わせていくのか、役割分担をしていくかという視点も必要。
- ・屋根や壁や道など、既存の人工物を緑化していくことも重要。
- ・2050年を考えると、大阪のグラングリーンのように都市の真ん中にみどりを作り出す「開発」という意味でのいわゆる「逆開発」という考え方も、あってもよいのではないか。
- ・地形・水系を重視することは極めて重要。あわせて、大名庭園や豪商の庭、近代の公園や民間開発によるみどりなど時代背景の異なるみどりが積層しているところに魅力がある。これらのことは、ツーリズムの視点にもつながる。

5) 東京のみどりを目指す姿

- ・カーボンニュートラル実現の取組として、緑地の創出による吸収量の増加だけでなく、剪定枝や落ち葉など、みどりの廃棄物の再資源化による排出量削減の視点も重要である。
- ・以前は道遊びができ、道路は公園よりも身近な遊び空間であった。もっと道路

をオープンスペースとして、みどりと親和性のある空間にしていけないか。

- ・水辺で遊ぶ視点や、その空間をスポーツができる空間にするというような視点を盛り込んだ指標ができるとよい。
- ・みどりの保全や創出は建築や土木など、都市空間を構成するような専門領域とうまく折り合いながら押し出していくことが重要。
- ・検討の3つの視点（自然の力、まちづくり、人の関わり）については、大項目である3つの視点と具体施策の関係性が希薄である。その視点を実現するための基本的な方針をどのように考えるか示す必要がある。

6) 次回に向けた意見交換

- ・新たな評価軸の検討にあたって、具体的な数値で例示するとよい。次回の検討委員会までに整理した方がよい。
- ・新たな指標を設定するにあたり、誰がどう実現するのかを明確にすべきである。
- ・新たな評価軸の検討にあたって、「Berlin Urban Nature Pact（ベルリンアーバンネイチャー協定）」など海外の事例を参考とするとよい。
- ・25年という計画スパンを考えると、現在測れるものを指標化しても、世の中から求められる尺度が変わり、陳腐化する可能性があることに留意が必要。満足度で測るとするのは面白い。大規模なモニタリングも東京都ならできないではないか。何年かおきに、継続して定点観測していけるとよい。
- ・継続的に同じ指標で示し、経時的な変化を追うことを考えた上で、指標を設定する必要がある。
- ・ファクトベースの基礎的なデータと、価値観を盛り込んだアンケートのような変わり得るデータを分けて検討してはどうか。
- ・基礎的なデータは定常的に都が評価し、民間事業者が別の観点でその基礎データを組み合わせて算出しても良いと思う。

以上